**ジャパンナウ原稿　　「人流」をオーソライズしたCovid-19**

人流・観光研究所を2014年4月設立して6年になる。主観的な観光概念の限界から「人流」概念を提唱してきたが、研究者より行政官の感度がいいようである。日本政府はCovid-19に関する公式サイトで字句「人流」を使用し、各国もsocial distancing、lockdownといった人流に関連する字句をメディアに流している。Covid-19が「人流」をオーソライズしたのである。

スペイン風邪は第一次大戦中の1918年に発生し1920年まで続いた。世界総人口２％の4千万人、日本では40万人が死亡した。兵士、労働者が各地へと移動して感染が広がった。多くの中国人労働者も米大陸に渡っていた。第一次大戦の戦死者は総人口の約0.5％であるから、パンデミックによる死者が大きく上回っていた。スペイン風邪による死亡でGDPが6％、個人消費が8％低下している。犠牲者の増加で労働力不足になり、賃金上昇したことは、中世ペストの犠牲で農民の地位が向上したことと類似する。

Covid-19は国内外を移動する旅行者によって広められた。最も効果のある施策はlockdownしかない。オーバーツーリズムと驕っていた有名観光地は、閑古鳥が鳴きだした。地域経済は、人流がないと繁栄できない構造となっていたからである。

19世紀、ロンドンもパリも急激な人口増加のために、庶民階級が暮らす地域の衛生状態は劣悪であった。そこに出現したコレラは、都市の衛生状態を見直す大きなきっかけとなった。1912年発生したタイタニック号沈没事故では、米国移民法が感染症防止のため、三等船室の隔離を規定していた。そのため死亡した乗客814人のうち528人が3等客であった。

Covid-19は、都市の危機管理と人流の見直しの必要性を教えてくれている。ニューヨークでの感染は低所得者層に被害が多く出ており、ロンドンのコレラを思い出させる。ベーシックインカムの導入による社会基盤の崩壊の防止が必要であろう。さらに無駄な対面接触の廃止等、教育、医療、販売、娯楽等のあらゆる分野で不必要な人流を削減する試みが提案されている。観光でも人流を発生させない楽しみ方が真剣に考えられ始めている。

